近世怪談霜夜星

巻之三

へ13
3569
3

早稲田大学図書

近世怪談霜夜星三巻

第三回　蛇のあやしみ　狂女乃溺死

東都　種彦著

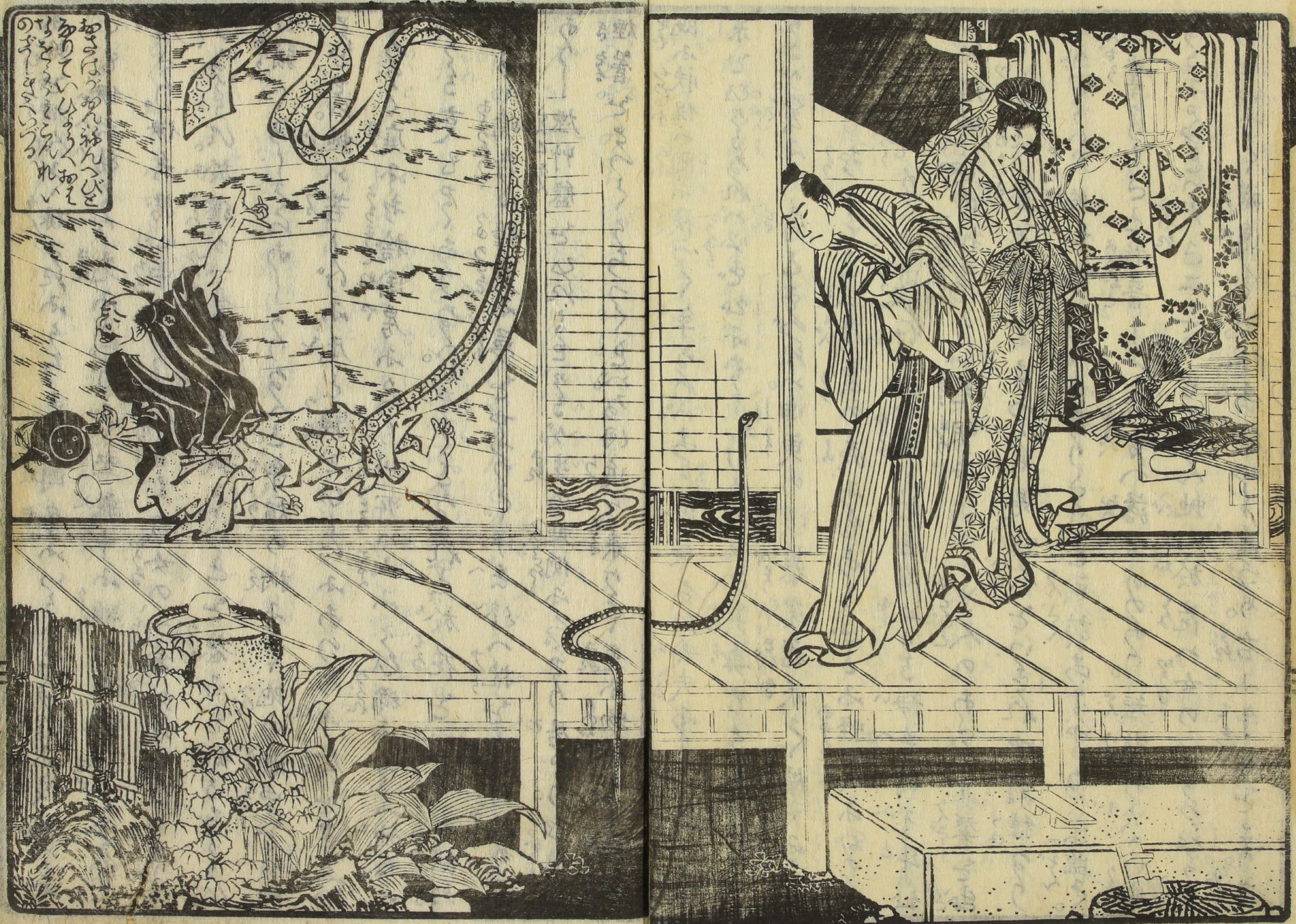
すでに憂八日をおくると年のくれ。漸く於花を娶るべく良辰にえらびける。其日は伊兵衛もつとわく髪梳湯をひえ支度なしける。程なく黄昏に至り花子は氷人歓次に誘引れ来りければ滞どなく酒肴をとゝのへ。むだくりの吉酒斟かはしに。於花なら銀燭の火かげゆかしく。面をそむけ居たりける。漸時うつれば歓次別を告。かへり来りし扶保が従者とも旅宿まで送らんとすれば二人ひきとむる押止その時に今一盃をすゝめければ。歓次うちわらひ常言に

門 へ 13
號 3569
巻 3

早稲田大学図書館
昭和 34.6.3 受
蔵書

も。甲夜の程といひ侍るに思ひの外時をうつせり。新人にはかく霜雪
と積る物語なしつゝと立皈りぬ。於花ハ芝浦の誰にかありし侍女婢
奴もあらざれバ。みづから枕辺の燈火を遠ざけ屏風ひきまハし。夢
おやすみと夜半の衣をかへしも。今日ハ忌てしれ言葉もなり
けり。枕上の戯言にいふハ。君妾を娶のふハこれ一時のたはむれにし
て。未聊睦じのひし。沢子さん退けのふ薄情なれバ妾も色なれ
小袖を身にまとひ粧ひをそむるうちに。斯枕をならべのふも秋の
野末の賤にすがめも落くありさんに。又異人を迎へのふらめと
いへバ。伊兵衛うち笑ひさるのうまひそけれども。於沢を退し薄情
なれバこそ身も我と私情を通ぜし伏保への薄情なり。於花面に
恥をしられ。斯のさまふハ理に似らく理にあらず。妾ハいまだ四五にて亮ぞ。

既に伏保ハ国に杖つく年なれバ。去とて似気なき女夫にあらしく。君と紅
糸をひかるなれバ必ず仏になしかけのふなど。其身もそのにおふし
けるが。爰に一ツ奇ともべきハ。四更の頃墓光飛来く。燈火にまさ
とあたり。おゝそと三度夏の夜にもあらざるに怪変にあそひ。
短檠を枕のもとに近づけられバ漸その光も止ける。伊兵衛不斗仏
づる。煙艸盆の抽斗よりた光明寺にしく里人のあるし簪を出
し。此簪をながこのまふらめ。是情人をいとられゆかね種なり
しが。いまに又昔を語る賜とすりうると。閑談しきりなるに臨く。
仰塵よりちると物音しく枕方へ落るものあり。短檠の火うけ殺
するにみれバ大さ二三尺もあるん蛇ハ。於花ハ女のひとなれなり。
あといらく飛退くを。伊兵衛おしまづわ。右に手燭をとり左


おさはがあん殺んへびを
ありていひやうへおそ
なそうろえられい
のぶしきさいつろ

に蛇を掴んで椽されたるにうちまき、閨房にいらんとするに彼蛇はなほ
くも伊兵衛より先にくゞりて坐敷中に頭をもたげ香をとめいて
居たり。伊兵衛心中におもふは、昔より女の一念蛇になりしためし
少なからず。於澤が一念蛇と成て、かれを怨るも知るべからず。
心弱くなしくハおもしろかりけんと、手燭の柄にて蛇の胴中をうたれ
ともせば。蛇は苦しげに尾と頭をひとつにあつめ。手燭をまとふを
そのまゝ庭に投捨、閨房にいり。此所は山にそひ添にかふ地なれ
ば、かゝる事もまゝあるらん。おそるべきことかハと於花を言好め臥ぬ。
程なく暁告る鐘声に夢をやぶられ。伊兵衛は枕をもたげ。枕の二ホ
ありし煙草盆をひきよせんとするが。先の蛇側にわだかまり居たりしが頭をもたげ
煙管をとらんとしたるを、母近寄り来りて先に物語せし於花が

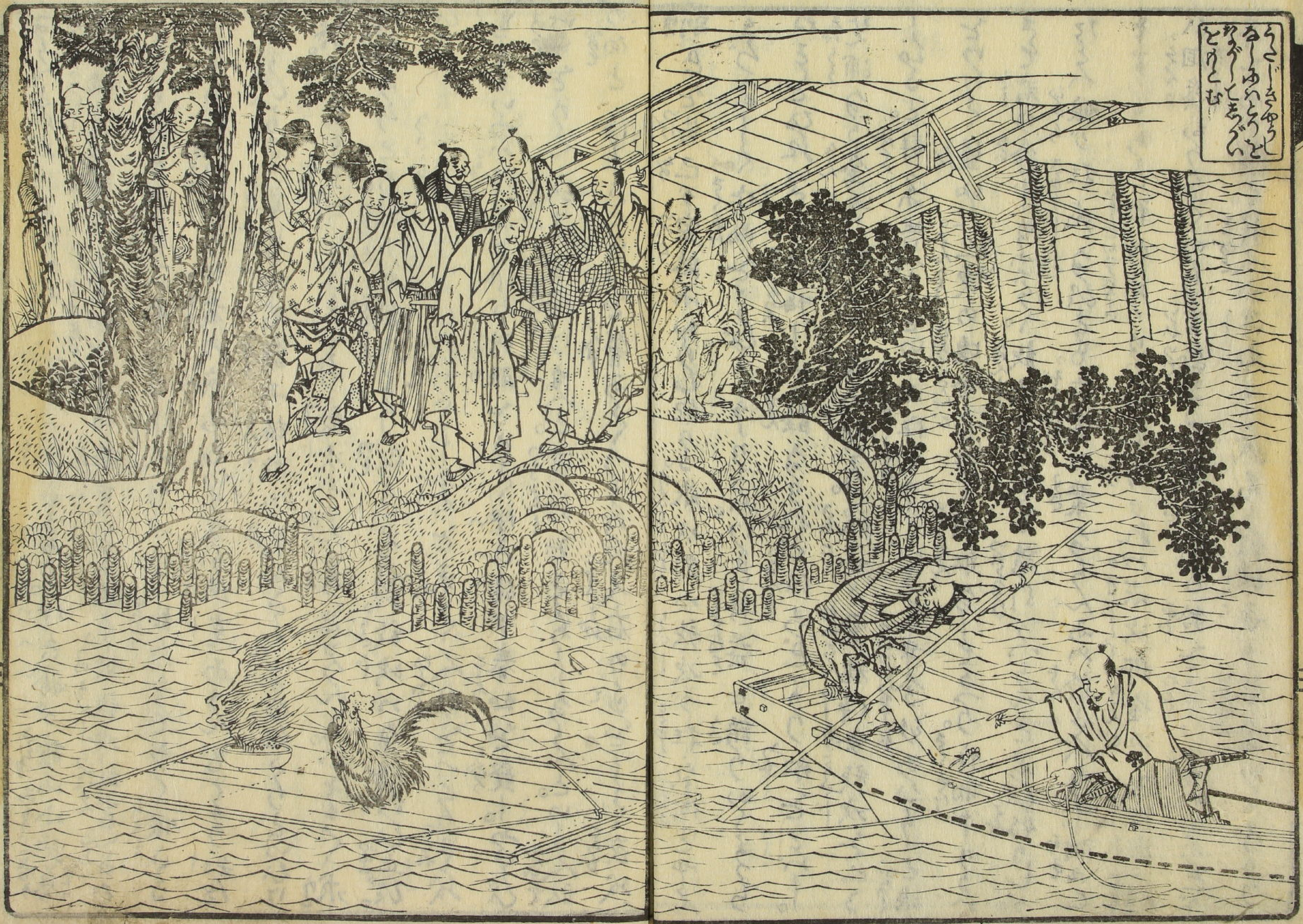
鑚を咥へのさら出るにハ飛んと。とらんとするに忽ち一圏の陰火と成
屏風を越して飛出れば。伊兵衛も水洒とおもひしが。物音にさへ
於花の目や覚しくおそれやせんと、食を被て又夢をぞむすび
ける。夫よりしてハ伊兵衛が猛心に。死霊やおそれけん何の怪事もな
く。幾年を経て二人の愛子をまふけ。兄を悦五郎となづく五才
なり。この頃縁づきし妹を於村と名号。又彼伊藤杖保へ年差なら
と。おのれ近き荘家なり養子をなし、此者を伊藤金吾と改め
今芝浦に住り。けふも金吾と水魚のまじはりあり。又欽次も子
のごとくおもひかはせ、我舘に来れば、彼両人の説話にしく半点も
空言にあらねバ、おぼろげに傳へ聞く。彼欽次が舎に此頃まべくあや
しきことあり。是ハ、しくは沢子が祟なるべしと。おそれあへるとぞなん。

されどその一言ハかくつゝまく我にだに語らず。さあれバ印籠を咥
へさりし小蛇も由縁あるものにあらざるべし。侍女欽次ハ彼欽次が女なれバ。
物がたりのうち少時席を遠ざけしことを拍く欽次を呼
びし。酌をとらせ又杯をすゝめれバ人々も目をみはりて恐れ。
ひとおやしき説話といひつぎしあひける時に不思義や先の小蛇
椽さきよりさまよひいでしあがり。欽次の袂のあたりへはひいる。欽
次呵と叫んでそのまゝ倒れ息たえければ。求次郎たゞち席にある
人々。ゑいかにしけると抱きかゝえて中にありて息出ざるを向
に水を洒ぎ。髪ふりみだし眼さかだり。恰も絵にかける鬼女のごとく。側
の銚子をとりて大地に投つけ。あら悔しやりきのちろし。伊
兵衛が女に計をつゝまんとせしが。只貪にかぼるゝとのみはらさでおくべき親類

もあらざれバ川にいりて溺死せしが。姉のおもひきや快保が側女と私
情あり。彼を娶んと本意とすれど悪さも憎しの一念忽地小蛇と
なり。伊兵衛が身に近づけど彼が勇気にさまたげられ。かねて
念ハ遂ざれど。かくまでも人の怨ハあるものやならめや己ら夫婦
三途ノ巷に誘引んと。拳を握り牙をかみ。ほとつく息の夕陽に
むらつく火焔のごとく。求次郎を恨めしげにおもひいるやがて求次郎
汝が不良口のちに多くの人の笑話をうけ出来おもひの雲の十重
九重つゝまれる言のうらめしやと。板縁をふくだらし。西へ走り東
へかけまく狂るさまハ。刀山剣樹の罪人のごとく。さすがに庭前を眺
るに此椽前にその重さまりかゝれる石盤あり。水端にとくへ
これバ己が顔の水面にうつるを熟と見。あなと汝わどろきる顔でも

なくば。げにも伊与橘に退けられじ。せめてものかはりに汝が父欽次
をも冥人となしたる怨あれば頓て泉下の鬼となさんと巳と巳が影を罵
る石盤に手をかけるが。ふりあふむけば克五六人の力をもつて動し
がたき石盤忽然として地をはなるゝ事三四尺。さらにちからをもちゐる
けしきもなく。いさゝかも胸をいためざれば。さしもの於澤が死霊の業なりけり
しかるのみか。求次郎をはじめ怕れおのゝきたる者もあらざりしが。架鞋
作助といふ男は。さとしく力量ありしが。庭されたりけるが。飛
あがりて抱きとむれば。欽次も後ろに摚とたふれ。のめるがごとく手
水をうちとりかへし。水嚢くと流れけり。そのかはり人くもよりて衛
に抱きかゝへ。一室に押こめ外より堅く釘にてうちつけ。元の席に
かへり。又一杯をかくれども此騒動にて大に興をさまし。それぐに

別れを告己が家路におもむきける。求次郎は欽次が狂気何とせん
すべなし。作助とうちよくはかりけるに無益と語りかくうち
ねをとひはべし後悔して詮なけれど汝もともに船をとるべし。
芝浦なる金吾欽次が舎にいたり。沢子が霊魂侍女欽次をとらる
しかると。詳らかに告べしと。ふに作助ひとしく幸今汐あひよしと浪
をけりて漕ゆれ三更の頃金吾のと同船なしそうつり。作助やうるへ
さて君の命じのまゝに。欽次どのをも誘ひくらんとおもひしが。
たゞ娘が狂死なれども亡霊の業ならんやと診べなし。明日こ
そゆうりめと戦慄ありましと告ければ。求次郎金吾を坐敷に伴
ひ。烟条おろりくのち言出けるは。常言にも鈴を盗む者は。おのれが
耳をふさぐ。異人に耳あることをしらば沢子が怨念かく


らくしきやうし
るしゆらとうを
あずしとまうぐい
とりとむ

あらんと思ひもかけず。足下なりしが故なく。伊兵衛が誰に小蛇墓
訛の怪変を語り出又如此その怪変をのべく。彼欽次乱言を口で
しるらち伊兵衛花子いさゝかり狀人あしくる歓次ゆゑ。かく恨る
のゆうかれば此のち伊蔵の家にも。いかなる怪変あらんもはかり知ら
ざらんば。かく尊客をも詳に様数を告んとす。ものみのかたりとひけ
れば。金五百も大になそと。まづ欽次が光景をみんと。おそるく於之
次郎かうとも。相戸の風入より覗きみれば。欽次はすね投ひ止ば。
ひそみゆく哭悲く疊をひれかぐし業を束く人形をつくり是れ
罵りをいふに汝花ちが此眼をぬく伊兵衛が春心を發し。かくび
此白をぬく沢子を退けぬんと。義計をそらしなんと。いふ人形
の面とおぼしきところを箸にてつらぬき又右の手をとしく衣故

ひきかけ。左の手をとしく枕にさらしめつゝんと。潸然と涙をおとし。
いふ声を於花汝つゞらに此胸におぼえあるらめと。三度箸に
てつき通せば。不思義や虎さけ肉やぶるゝがごとく。鮮血淋々と
あふるゝばかりなれば。求次郎金吾は二目とも見ず。後堂に逃かへし
それは面土のごとく。漸にもよりまづや虎も更ければ。臥戸にいりて休み
けり。かくて作助は昧且おきて起出。欽次が押籠をあらためし一室ほかに
に音もなきをいぶかり。ゆるゆる杉戸をひらきみるに藁人形一ツ
あるのみにて欽次は見えず。出口をかゝて戸ざしおれしが。走り
出ん道理なしと見て見れば拳をも出しがたき格子に髪の毛
数十筋ひきかかりあり。こはいかにや出んとつくあやしみ。求次郎
金吾ともよび起し。宅地のくまぐまあるところなくさがし索ども

それとしるものもなく。只欽次が髪飾海辺におちありしにいぶかれ。家へおくられけるに。をさしく小袖の裳浪間にひらめくと見えし。急ぎひきあげければ。あはれむごしきその顔色かはりもなく。藍のごとく青く瓢のごとく腫。湊のうちに溺死せしありさまなりと。何まづさくその趣を告。死骸を欽次が方へおくりけり。尚花方の家にも崇りあらん事をおそれ。僧を請じて経をよましめ且へ一伍一什を書簡に志るしね。作助を使として鎌倉へ走らせければ。日あらず伊兵衛が宅にいたり。於花にも対面し。求次郎がありし事を物語せしなり。於沢が霊の欽次をとり殺せしぞ。金吾もかのあたりなるやぐおちもなく語り出。彼死霊を避る事簡要なるべしとねんごろに告ければ。伊兵衛夫婦大におそれ。背に火のつき足もとより

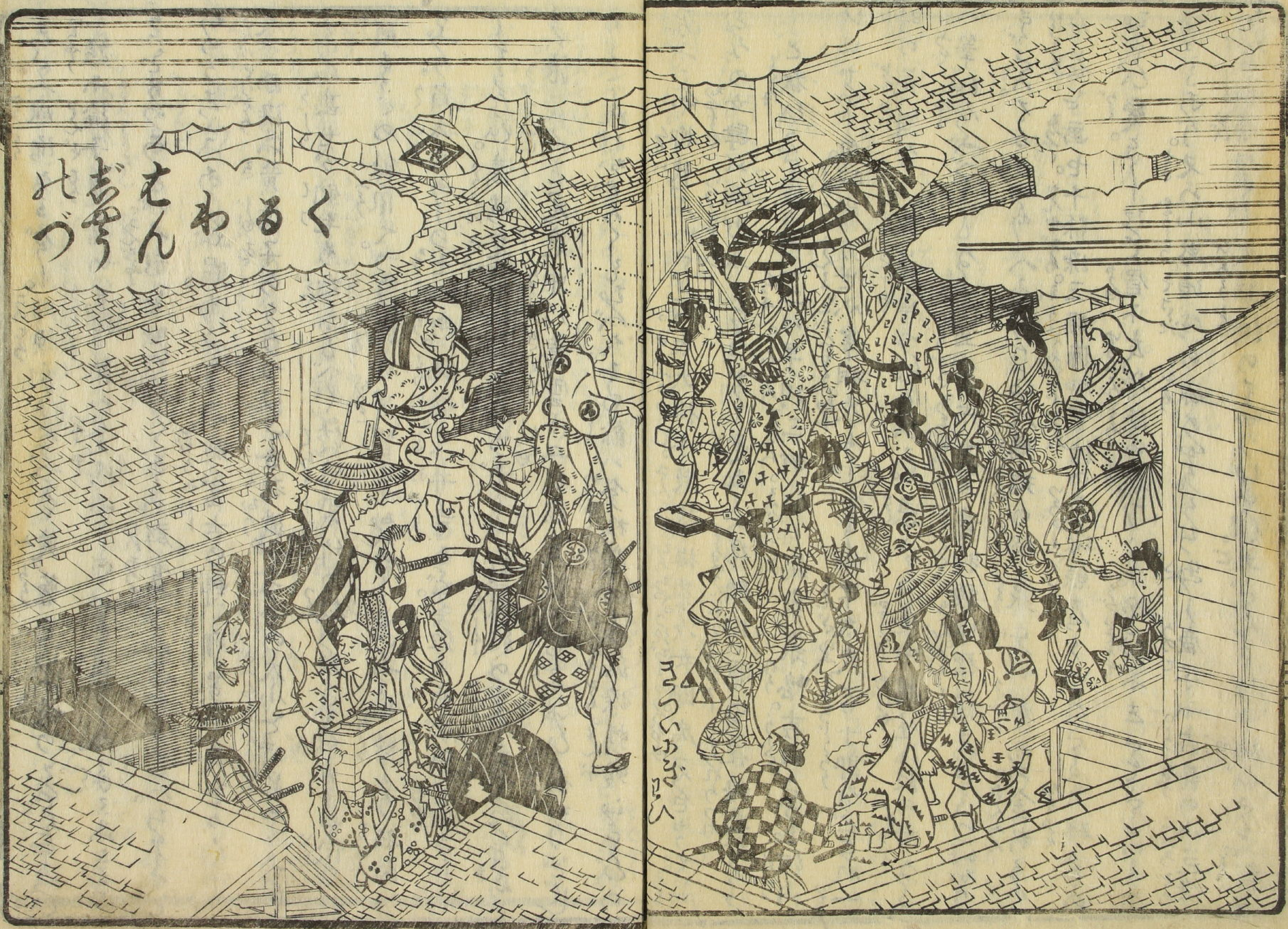
蛇の登るがごとく。急ぎさがのうちの宮居なり。神主をたのみて禅などせしめ善を施し身を慎みけるとぞ。これよりも両家つゝがなく無事にしくらされけるとなん。

第四回　花のちまた　夢乃奇事

陽馬羽をゆきわば。たゞかくも三年の星霜をかさねしのち不良事出来て遂に花方伊藤の両家断絶せ。其縁故といふへ求次郎往年より偶友がきに誘引れ。花と柳の巷に眠り。隅田の川なるくるさ浅茅が原の笠やどりになりたり。女肆がかひ止とあらず。此頃名ごうれ巴橋津島とゆうん小殊に相愛の情きかく且夕更に家にあらざれば。求次郎が伯母近きあたりにありけるが。此事略ゆ及び甚ふかく

求次郎が妻迎んにハきくぞうしびと既にその支定りしに求次郎ハ
きさらつるかん二万芸なりし。又従ひなんとゆめ〳〵津島と枕上に誓ひし
そのふかんぞなひつけ。ひとやう此度白地に津島にひなまん
うんともかうも計んと。花巷に通ふる頭金五十両とも折にふれそのを
つねしに一日金吾求次郎が舎を訪ひしぞかれかうらとまくめ
つ。そのに宮戸川に棹さゝせし船ハ一葉を浮めしらちらし。三ッ櫓二ッ
櫓逸をやく北と向く走と。両岸足ありて南へあゆむぐ。右に
うとしの森松柏杉をゆかへ左ハ並木松のむらぶちふく。三谷通
ひハ稲荷の岡の馬に乗又ちゃぶどのんゆれ網をまれさといふふさを
さるひ。爰に三尾かしとに五尾酒など賑く肴板ハ桜のまどゑみゆひつた
蕎そばのみせハ一膳六文うけねるしとまくせし行燈を出し鬼□なん

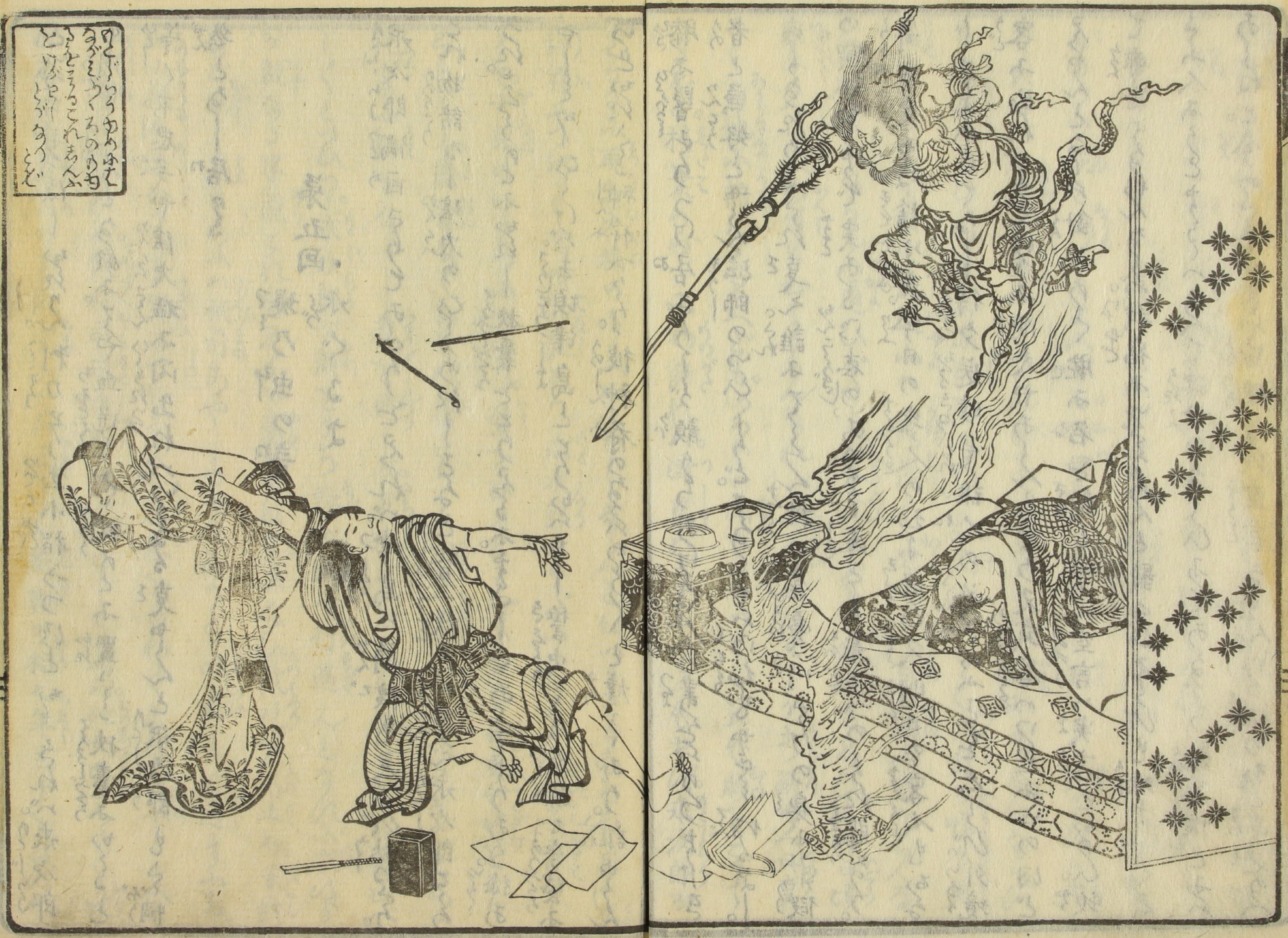
乃ふあるや柳巷にいふとべ。太夫格子散茶梅茶次女郎。局見世まで。品
多なの女肆ハ五町にまとまりやく建るべく。様顔柳腰の花娘我なそら
じと粧ひけるその一二ハ早川。三河。江口。定家。家隆。吉田。さゞゑ。河内
坂田やひし由。政常万世小宰相大かし。小あし。半太夫吉十郎などこれ一
時の花魁なり。売花車つれそひて。宴ちう道中揚屋ゆれの嘩なる
ハ筆になかぶべうもなし。塗笠市女笠奇特頭巾摺箔あるつけたり
まづさへそるうつめしへふるありゆれ瑇瑁の櫛象牙の簪ふ金粉めて
唐花を画せ。千弥染三好染加賀绪の色染鯨屋ういとなる大磯ちうの
ゆかりの髪ふしたて眉ふ友禅染の丸づくし鶯納戸にまとそゝるけるへ
げるあり。又ハ山路。須磨の染のやうらち出し鹿子に吉長の小色染
をかさね。帯ハまじ天鵞絨のこまりむすび。五ざんさげに結びさるへ起と


くるわもんぎやうれづ

あさふ風流なるべし。此頃はやりすぐく芙蓉といふ妓のむかしをやれば。一振に綸子鼻緒の馬下駄は今様にしくいと目だち。手にもなら
ことのほかさべく人形をかい抱くあり。群集るかいそどもはちかさを
おのがまにおゆる品あるなかに臙富士の野郎笠は肩をとうくし。
根く明染に黄繻子のうちつけたる羽織をつぎの大小と行器さし
たる甚七が剃毛や鞘なるべく。後竹紫竹の杖つれたるはうしや風呂丹
前もさくの餘風とつり髭の男は鬼のみのしとうたく頭より羽織を
かぶり角太夫ぶしの七小町。袮音。三井寺など。やれしもぶねの扇うち鳴
してうたひ。高砂足袋細緒のなかぞうり朽木綿の丈たちりぬをきる
は浪花人とみえ中川喜雲が口まねをいひ。唐子ゆひ扇ありと
わしそあれば。おぞくもなべくその餘は今様帯の振染蜻蛉むさしの

藥やんがく。むらさきのかさ頭巾焼印おしたる竹編笠ぞやさき空手振
は玉水鈴虫のうた。証宜の道行あつひの浄瑠璃。らうさいのんや
れぶし。小諸節口くにうたひ。見ゆ年は蜘の糸ならぬの天の雲白ちり
めんの綿入ぞあり。雲間ぐでき。緋ぐくしのぞとあるあり。南にやぶり。
北にさる賑ひさらにいひつくしがたし。程なく求次郎金吾は巳や
う橋のおれれば珍魚一尾百銭をいとはば海山のさかなをとらのへ雛
妓禿などあつまりあそびけるしつ。中ぞそ相方津島も出かるが。青
年端麗ふしく花貌柳腰なぞそるあり。求次郎がちかよくもせむ
ありて金吾もむのうちにおもひけるか。その夜は両ぞひなりひとしく母ぢやのう
なれば金龍山の別れの鐘もまちそにゆするし。きぐるゝまし日二月とか
ありけるかくてある夜求次郎津島にむかつくやりけるは。汝と日頃とかく

馴染しもはや一年あまりの偶なかなりしがその後身にそひて煩悩
の犬なれども退らば又此身もかくながく契りあひし。なのられし
そもいかんならし。幸ひ口にさぶる書もあり。此身を頼て迎なば。
あのつけの花と咲んといへども。伯母なる者かたく制しく許さねば三十
ちかきすぐ寡ぎみ人の身なれば其人もあきらめて切にせまる。かかるならば
も唐衣つまもかはるまでに絹をかさねね。花あるときく此身の情今更
忘るるにはあらねど。筑波山の麓茂く通へば。人目の関もかかるなる
ものかは。かかれど通ひがたし又逢まで余波と思ひまつ日頃
家に帰れば。此身も心ならんなれど。今宵はひとしほ弁解あへ此事
をく白地に語んと思へども。いかでの山の岩つつじいかで胸をさがし
つる。枝葉のなかに物語れば。津島はさまにいへもせば。求次郎が
膝に髻をりつけ居たりしが顔うちあげて。人は書などのつまづき
者と兼好とやらん法師のいひしかど。さすがに此私も女ぞと侮るまじ。
いかなればとてこれ之誰にかこたん。枕の塵憂川竹の身にし假
の契にかくもぞ実ある此志のあつきこそ泉下へのなき賜なり。
寄方定めぬ捨小舟。今日の客人の意に従ひ。又明日の客人もある
じきよのそなし。待夕送暁是誰人の為といふことをしらば。外境
客に出れば其ほかに間夫やあらんとせめ又或客は口ほどに心の隔ど
なきやんとあらば針をとめく腕に名を刺とおしへ。空言は実言とおもひ頼
て廓をかくれんあらば我宿にいざなはんと。髭をひそれも疎ましく。ま
きふ人にちとまちてはまへで浮世のまよひにぞ。なまなか殿と恨とやか
あらねど。今のくるしさは皆跡なき空言ならん。何心のあだ是見えれへ


のどぶらうかめはて
なぶとうくろのめち
きとこるこれまへぶ
とけいやり
とがなつとど

とつゞけに隠しおかれし剃刀とり出小指にあてゝおしきれバ求次郎
も周章止んとするほどにはや血迸りて枕のもとに置たる挟嚢にかゝると
等しく不思議や陰火猛に閃出れバいかなる事やらんと求次郎もあきれて惘
然としてぞ居たる

第五回　堤乃虫の音　水ぐるま

求次郎偶目さめてあたりを見れバ津島ハ前後もしらず臥けり。
これ物語りし陰火のひらめきしなど皆一炊の神夢にて求次郎ハ
いかさまにもと不審しく挟嚢をとり見るにまさしくおさまりありしがお
やしなひしかバ去頃津島とともにかへりし誓火なりて血染て守袋に
いれおかれたる神府へかゝり。彼神府のなかバやけてこげたり。誰ゆゑん

ならさふに取出火桶のあたりへおとせしものとみゆ。むつかしき事をおもひて浜
神府につきてしばし一ッの話説あり。求次郎ハまだいとけなき時子育なし
とて女児のかたちにつくり。髮をひさげにゆひ奇貝寄竹をとり
あつめ餘念なくあそび居たりしに年四十ばかりの女の何者とも
しれぬが来りて小鈴をならし巷を過しが。忽地足をとゞめ額をあつめ憐むべ
しとつぶやいて。求次郎が顔をうちながめ。旣に行過んとせしに求次郎
が親なる半藏これをみとがめ。易占をよくする女ならんと彼祝を呼止め。米錢
など施し向ひて祠司おやじのわけをたづね。吐息して過ぬるを。
此小児は若いかなる災ありてもおそるべき慈悲をこうむりたまへと
叮嚀に向ひけれバ彼祠司求次郎をみながら此小児見るに瞳
のまなこに若月のかげ雲あつて正しく劍難の相あり年三十にならバ

かうびなれど同人なれば語んハ物じんにも似ざりしと云へど。已にあまりて遂に言葉を發せしくと物語れバ半蔵ハ大ひに外に子もなく。実に獅子の玉を弄ぶがごとく。いとをしけ長るを悦び。けふ老の来る事をわすれ。此妖孽ハいかにして免るゝ事あらんと示しあへど餘義なくその内に。或ハ一言にも及ばず一枚の白刃を引出し。朱をもつて海松を束ねたる如くの文字を書なしてハ此符をいましく。二月三月の間ハ幅五尺にも足らざる小川なれども舟を浮べ。又いかなる事も不浄に穢さずあらバ罪を蒙るを泥をぬらく身へ及ぼすなりも速からんといはんかつく。遂にあらくなる所をもしび。此祝を見ありし人のいへるハ昔の肥前國長崎の産にして。青木主計といへるものなり。某の神祠をまもり。或ハそれなり人かけなれ罪に行せられ門戸を青竹にて閉られけるなり。神に仕ふべき

うんやしあをきかぞへもとじらうが挿きをきゝけんなんのさうありとぞゆる

身にあらびとも。四方の國々旋行し。駿河なる芙蓉峰にのぼりて
すその根にのぼりくだれバまたその枕にむすぶ草ぶねもなし
とゞめるなどいとあはし。さるやんごとなき宮人より召れて。神代の巻を
講ぜしめ。恩賞あまたのたまはんと聞えしかど望所にあらずとて両腋をも
まさで行方しらずなりけり。此神符をおさめし果しく彼主計之と云し。
これより求次郎ハ肌身はなさで神符を持たりしが。今津島が容貌に
迷ひ誓文の血をもて神符を穢し。此災をひき出し。是正に胅保が
家を絶さん為なれバ。於澤が怨の枝葉にして。譬バ時雨に蔭と
なりし紅葉も。晴てのちハそのいろをうしなふがごとし。此ほど求次郎
迚もむづかしく津島も目覚て互にゆめからさめし物語ありける。三
浦といへる禿もち来く。誰ゆへ君におもひをかけ出ありとおもふも

るもやらで入来るハ。是も近しきごろ朋友になりし。卯月宮太夫といふ
ものなるが男めりと頬刈組といひし人の旋輿の席に無礼に押いり。
又ハ十字路に横行なし怒れバ則殺さん刀のかゝを不吉とする一個の
悪棍なる。その出たちをみるに都富士の大編笠をまぶかに奥志まに
肉色のうつれなる棒をさし近江布の羽織を着長佩刀短中刀ゝ
めくさしなり。かくかゝねどもちんぷんかんの言葉を巧にし。便僻諛ひ求次
郎になりけり。今夕もなるれバかりうとおとゝを慕ひて来れる求次郎ハなる
より何となく久しく訪ひもせざりしやと互の挨拶をなり。金五両とも向
おことをされども日々の大酒に生を隔しぞくるれバ先二人にて支
足ぬと。その頃流行る河内流のなげぶし。吾妻なりのぞてがし
なぞ声おかしく唄ひくくも奥にいり玉杯めぐり止ば殊に宮太夫る

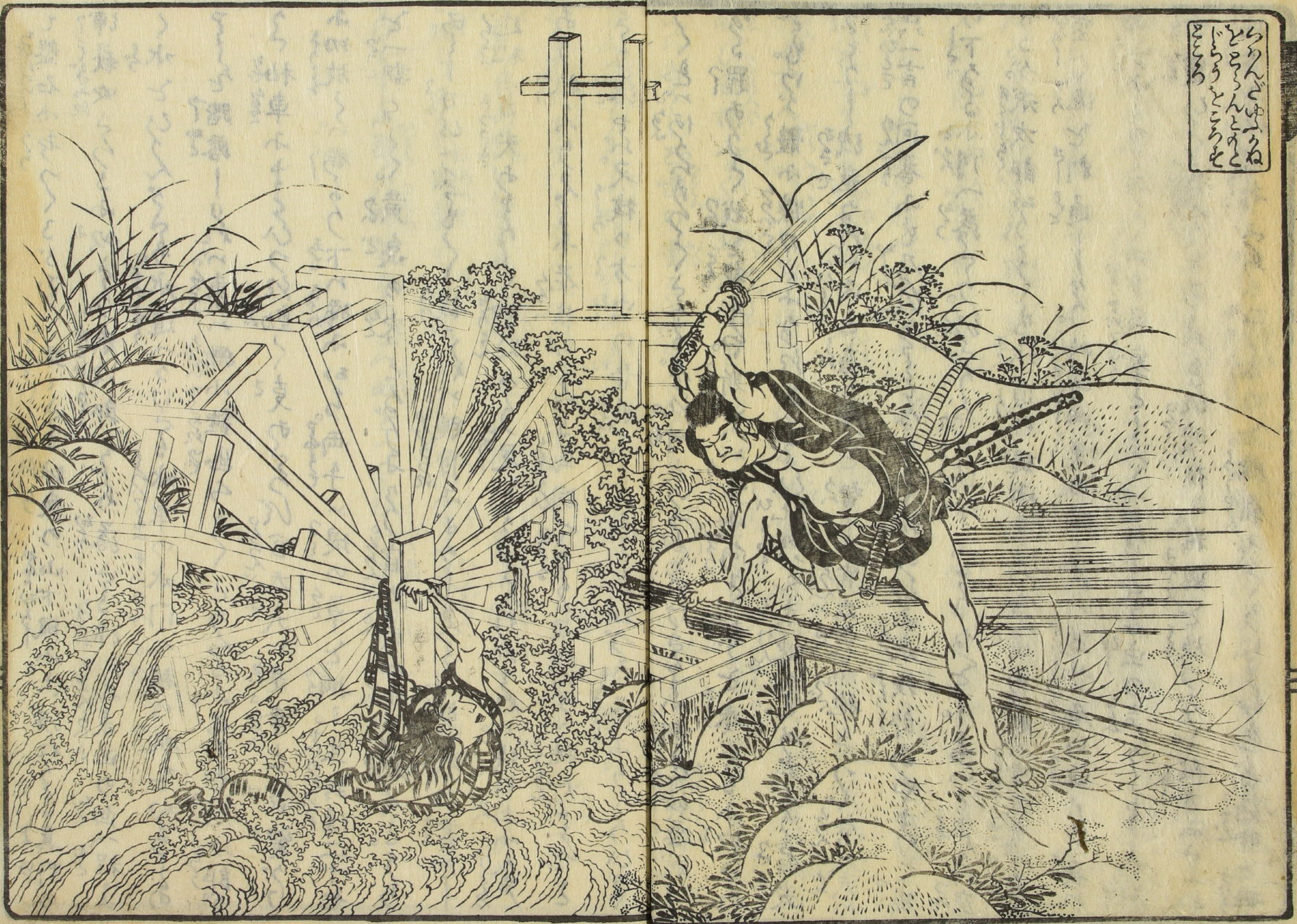
ふじ江さ車よもとじ
ろうをぜうらいえし
う孫をとうむいさらん
ともへやのふういに
きとるところ

鯨鯢の百川を吸がごとく大酒にて。津島求次郎も大に酔を発せし
が。官太夫はいへば。又求君ものごとく秋衛更て。花街に名高き名残
の雁堤に近き虫の音など又ゆかしからずや。ひとまづ此楼を立出ぞ
かれとの事虫啼に往なやと只管すゝめければ。求次郎は衣桁にか
けある肥後木綿の裾のなき子持もぢ染なる金五両が羽おりをうち着
て立出れバ。津島はふたゝび明日は館へ帰るものなり。今宵はいかなくに
物語も候べくと止けれど。緑霞春風あしのとさん定らぬかつかんも
ちび出行る憐むべし求次郎が命朝露に等しき雪仏のごとく消黄
泉の旅立にしてふたゝびこの国を踏ざる身ゆめしらねも又嘆かし。
津島も花巻なるものもなくはやくにおくれども詮なくあたる待合の松乃
けとある床机に腰打かけぬ実にや皓てらす秋の夜遅てらす春の日

なに長しとやぶる契あるにこそひ一夜にしていつも又錦被を同床にならべ
とさしもいはれ口覆ひまつるべし。人も目止る美人ぐ。さても二人ハそれより出
駕づけの松をも打過しぬる。官太夫ハかの貴客のごとく斯廓に日ご
ろかねなくも旋宴をひらきのよと向ければされバ我花街にてよ
を厳しく警る者あり。されど賊のひまありて守人のひまをうかゝん。
東に家にあらざれバ。とく妻迎へんこともなくひとりくらしと遂に其意整ね
なぞらへ花巷の兄弟とうちいひ此日頃娼家に居れり。強家を忘れさる
にもあらでと物語るに官太夫ハ心中に思ふへ。此求次郎元部ありり
て頗富家の書迎ふるにすこしてハ極く奮金の類の物あらんとれに
よりく斯巴楼に日を送に疑なし。忽地悪意を発しかねなく言
らくいと此頃賭に利を失ひてたゞ泉袋を覆にてなりぬ

あら木綿のきれはけのこゝ偏に足下の恵をうけざんべいつぐ赤貧の病乃
根をたゝん。子銀雅にても貸されと。おしつけがましくいひけれバいかに
爰ハ途中え家にハかへりしのち兎も角もせわと答れバ。官太夫ほさ
あとるひつゝよく恵をうけんとかるべ。明ケ路を同じ尊客の館に到ら
ん。と言葉をうまね諭て訥てといふにぞ。求次郎耳めうかしく。いそ
けなん虫の音ゆんがさき出たり。足下の賂の吉山ゆにハ来らんと
さしふまうあらねバ官太夫も口を閑叢にそらて虫の声を的しぞ
堤を下りけるに。楊柳の木立月に影じく。鉄地小路に横たはるがごとく。
何とやん空吹風も寥落くおぼゆる時官太夫私にハ金吾ハ酒に
酔ひ已様にハ銭面跡をきらん道理なし。畢竟殺害して立退
にハきわまりし。懐の重きに目やうつきりん遣せしると求次郎に切

つくるバ何ゆへかくはするぞと。呵といふてのけざまに倒る汝悪賊わ
するる罪ありて我を殺さや。斯云ハ牛に向て琴を奏するに似たれ
ども。ばず體に懐刀ぶふかれとるしひ入比興え赤練くと。めとりり启尖
うそりし浅痕なれバ内と右へ身を習し官太夫に抱きつく。官太夫へ
只一言の問答にも及バずうるさもなしく切さむに求次郎おやまりて堤
の下なる小川へ落たり。ぬくりと刀逆手にとりなをして。悉いと声かけ突
けるが。求次郎おりうくも水道の樋にとりつき這あがれバ官太夫が刀ハ
空く泥を刺通したり。此時四更の頃なれバ道哲庵の鉦も哀れ
に聞ゆるのミにて。四方寂寥として一ツのみぐる虫の声うしやかく。村
雲霞ひくく月全くおかえども暗夜に鵜鶏を放つごとく。彼方にふれ
此方に伏。又おかなる二ノ太刀を腋扇にうけとめたれど。鶏卯を握



て盤石にあつくるがごとく。颯々たる比良の山下風に。吹ぼれかゝる真野の浦萩吹かゝるに似たり。求次郎そゞろ落かゝる流れは。元来田の面へ程よく水をひかんがため。水道へしかける水車の水門へ。樋の板をおろしおきしを踏落しければ。車は漸に鏗出かゝるとめぐるにおのれや求次郎がさし柚車にまきひかれ動く度おもろに官太夫と是幸と袈裟がけに切放さんば腰より下は流れにおち。両手は堤の草を摑み生齢僅二十七と一期とかく。黄泉の客となりにけり。官太夫は止めを刺んとうちあらし刀ひけども抜ざれば。朧月にすかし見るに萬巻と書たし辻札に刀尖あまりく切込たり足をかけくねんとすれば。堤の上に人声あり。振かへりみるに花巻がかへる馬飼の刀うちかつぐ挑灯をもときり落やれば。又後の方虫の音俄にとだえしに心づき叢にかくろひさ

らぶべへ果しく小路づたひに来る者あり。さすがにそと銑鋧をもちし左うちつくるに的をはづれしと見へ右足をも身にそへるを逃んとするに後へひき戻をちあれば心をしまいて窺ふに求次郎が挾嚢に紐をつけ首にかけありしを切らざりし。周章て是を取りかくれば四方に人声しく。やれ人殺よくと呼はりしに驚き畔をはねこし畦をつたひ行方も知れず逃失たり

霜夜星三巻畢